

京都大学	博士（地域研究）	氏名	成澤 徳子
論文題目	アフリカ農村社会における女性の生業多様化とジェンダー関係の再編 ーザンビアのトンガを事例としてー Diversification of Women’s Livelihood and Reorganization of Gender Relations in Rural Africa: A Case Study of the Tonga in Zambia		
（論文内容の要旨） 本論文は、ザンビア南部に居住する農耕民トンガの社会を事例に、活発な展開をみせている女性の非農業活動とそれによる現金稼得が、在来のジェンダー関係のなかでどのように実現されてきているのかを明らかにした上で、在来制度や社会関係の枠組みの中での現金稼得活動と、それによる女性のエンパワーメントについて議論することを目的としている。 アフリカ諸国の農村部では、80年代の経済自由化以降、小農世帯の生業活動が多様化するなかで、これまで家族のための自給用作物生産の主要な担い手とされてきた女性も多様な非農業活動を展開し現金を稼ぐといった変化がみられる。女性の現金稼得が、各世帯の生存レベルで重要な役割を担い農村経済全体を下支えしている実態が明らかとなってきている。そんな中、農村女性の現金稼得活動の展開に着目したジェンダー研究には、女性の活動が男性側に受容されにくく、男女間の緊張が高まってきていることを指摘するものが多い。本論文は、この点についてより緻密な議論を試みるものである。 第1章で、問題の所在の対象となるトンガの社会と調査村の人びとの生業活動について概説し、調査方法を示したあと、第2章では、村びとの雨季の主生業である農業について、主要な自給用・換金用作物である男女協働によるトウモロコシ耕作と「女性の作物」の耕作について分析した。伝統的な共同労働慣行が衰退するなか、女性たちは世帯を超えた拡大家族単位の農作業と世帯単位の農作業に全面的に従事している。その中で、女性は協働的農作業の余暇時間と家長の畑を利用し、限られた範囲で「女性の作物」を生産し現金収入を得ていること、さらに彼女たちは、拡大家族内で行われている緩やかな共食関係の中で、農繁期の家事労働の軽減や食料の安定的確保を実現し、さらに個人の現金稼得活動を保障する女性同士の協力行動を実践していることを明らかにした。 第3章では、乾季に展開される女性の非農業活動を、各種生産物・加工品販売がおこなわれる場に注目して分析した。調査地周辺には定期市は存在しないが、女性たちは村びとが大勢集まる地酒飲み場や儀礼の場などを「いちば」に変え、販売活動をおこなっている。「いちば」における販売活動は、既存の社会関係が売買のやりとりに反映されるローカル性をもっており、多くの女性にとって障壁の低い活動であった。また既婚女性にとっては、夫と一緒に活動ができる「共有の空間」でもあり、夫の理解や協力が得られやすい。女性たちは、ローカルな社会活動空間を経済空間に組み替え、			

また楽しみの場と経済空間を融合させることで、世帯外での個人的な現金へのアクセスを実現していることを指摘した。

第2、第3章で示した女性の現金収入の使途に関する聴き取り調査の結果、家族の疾病や儀礼などの臨時的支出を除き、その殆どは、子供の学費や家族の生活費に充てていることが明らかとなった。このような支出傾向は、多くの先行研究が指摘する、女性の現金稼得増大によるエンパワーメントの限界を示すものにみえる。しかし、参与観察の過程で、調査村の女性たちがその収入を使い農閑期に遠方に頻繁に出かけることが明らかになった。第4章では、村びとの都市短期訪問に関する調査の結果、村の女性が男性よりも高い割合で単身、都市に住む親族を訪問していること、さらに彼女たちが現金収入を利用して、「友情セレモニー」を行い農民組合へも加入するなど新しい社会活動を開始していることを明らかにした。

第5章では、携帯電話の普及について分析を行った。後発情報化社会における情報通信技術へのアクセスに関しては、地域間（農村-都市間）及びジェンダー間の格差の存在が指摘されてきた。しかし調査村では、女性の中に男性と同割合で携帯電話が普及し、その普及にあたっては、購入以外に都市親族からの贈与によるものが比較的多いことが明らかとなった。女性の現金稼得が彼女たちの移動や活動の範囲を拡大させ、そのことが彼女たちの社会的ネットワークの維持や確保、さらにそれによる生計の安定や社会的保障の獲得につながっていることを指摘した。

第6章では、女性のライフサイクルを念頭に置きながら、彼女たちの社会的属性の違いによる生活や立場の差異に注目し、女性による自立（律）性の高い社会経済活動の展開について再考した。離婚と再婚が頻繁な社会のなかで、女性たちの語りから浮上する「結婚へのこだわり」のもつ意味について検討し、夫や家長といった男性不在の場合に見られる女性の脆弱性増大や、彼女たちのエンパワーメントの限界性についても検討した。

終章では、以上を総括し調査地におけるジェンダー関係の再編について考察した。アフリカのジェンダーと開発をめぐる議論では、女性の地位や活動について男性からの改革的自立を求めてきたものが多かった。しかし本論では、トンガの女性がジェンダー役割の抜本的な変革を求めるのではなく、農村経済の季節性をともなう循環メカニズムと既存の社会関係を利用しながら、より穏やかな仕方で自分たちの社会経済活動の領域を拡大している様相を提示した。ジェンダー関係の全面的再編を前提にした女性のエンパワーメントではなく、本論文で明らかにした、女性たちが社会融和的な方法でエンパワーメントを達成する方法をも評価し、制度や権力といった地域固有の文脈に埋め込まれたアフリカ農村女性の自立（律）性を評価することの重要性を指摘した。

(論文審査の結果の要旨)

1970年代の後半以降盛んになってきたアフリカにおけるジェンダー研究は、それ以前の社会科学研究で描かれてこなかった社会的・文化的性をめぐる関係性に光をあて、アフリカ社会の理解を深める研究成果を多く挙げてきた。そしてその10年後、アフリカでは、このジェンダー研究の成果を急いで開発政策に反映させようと、ジェンダー概念が地域開発レベルで盛んに取り込まれるようになってきた。実際の地域開発レベルでは、援助の効率や透明性が求められることもあり、ジェンダー開発の焦点は、女性や子供のエンパワーメントに収斂されるきらいがあった。研究レベルでは関係性の概念として豊かな可能性を持っているジェンダー概念が、援助実践の場では、援助関係者が考える比較的平板な概念に置き換えられてきたという経過を辿ってきたということになる。これが、アフリカにおけるジェンダー概念の置かれた特徴の一つである。

申請者が調査を行ったザンビア南部のプラトー・トンガの農耕民社会は、ジェンダー研究と女性エンパワーメント援助との両方の対象となった地域である。本論文は、このような地域における女性の日常的生業活動や生活をみることで、ジェンダー関係の内実を明らかにし、さらにその変化の有り様を考察しようとしたものである。本論文で明らかになった点および重要な論点は以下の通りである。

申請者は、女性たちが、雨季の農作業である主食用作物栽培では世帯を超えた耕起作業（拡大家族単位）や除草作業（世帯単位）に全面的に参加し、また日常的な食事においても拡大家族内で共食を行っていることを先ず明らかにした。その一方で彼女たちが、協働的農作業の余暇時間を利用して家長の畑で「女性の作物」を生産し現金収入を得ていることや、共食関係を利用して家事労働の軽減に努め個人の現金稼得活動の機会を増大させるという、女性固有の活動領域を持っていることも明らかにした。

さらに女性たちは、乾季になると、地酒飲み場や儀礼の場、さらには村人が集まるいろいろな機会を捉え、様々な品物を販売して現金収入を得ていること、そしてこれらの活動で得た現金を、生活費や子供の学費以外に、女性自身の諸活動にも使っていることを明らかにした。彼女たちは男性よりも頻繁に都市の親族を訪問し社会的ネットワークの維持に努めていること、また「友情セレモニー」と呼ばれる交換と饗応の社会関係を構築したり農民組合へ加入するために、その収入を使っているという。都市の親族訪問は女性の社会的ネットワークの維持にとって非常に重要である。近年、携帯電話の急速な普及により、このネットワークが空間的に拡大され、女性の現金稼得機会がさらに増大してきていることも示唆されている。

申請者は、女性によるこれらの農業生産活動、農外活動、都市訪問活動が、農業の季節性や夫との間の既存の関係性を利用しながらそれを破壊することなく、より穏やかな方法で拡大されてきた点に注目する。第6章で述べられた女性の語り、すなわち「結婚へのこだわり」や、「夫や家長といった男性の不在がもたらす脆弱性増大の怖れ」は、彼女たちの社会経済活動にみられる自立（律）性増大が、社会的・文化的性の関係性の中での限界を示しているように捉えられがちであるが、申請者は、そこには女

性たちの自立（律）性増大の試みの多様性や巧みさもあることを読み取る必要があることを提示している。

以上、申請者は、様々な日常生活レベルの中で、ジェンダー関係が日々変化していることを詳細な調査で明らかにした。それは、女性エンパワーメントのプロジェクトでいわれているような方法ではなく、既存の社会システムの中でのジェンダー関係性を破壊することなく、「ずらし」によって確実に実現されてきているということである。アフリカにおけるジェンダーと開発をめぐる議論では、近代化政策の負の影響を受けてきた女性の地位を高め活動を活発化させるために、男性からの改革的自立を求めるものが多かった。そのため本論文で明らかにした、「ずらし」による社会融和的な方法による女性のエンパワーメントの達成は、注目されることがなかった。本論文は、女性たちの「ずらし」の行動が、自立（律）性の限界の中での行動ではなく、したたかなエンパワーメントを裏付ける行動である可能性を具体的事例で説得的に論じたものであり非常に優れている。今後のジェンダー研究にも大きな貢献をなすものであり学術的にも高く評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 24 年 1 月 30 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。